



古事記

宇宙の創始

— 実在 — (五)

反省的方法

— 存在論, アリストテレス

竹葉 秀雄

哲学は宗教的な反面があるとともにどこまでも反省の立場を維持せねばならぬ。単に直観のみでは哲学は成立しない。神秘的哲学は宗教との一致する点で妥当性を有するが、そのみで哲学の方法とすることは出来ない。絶対が絶対として具体的であるためには却て反省の対象たる相対の独立性を認めなければならない。「歴史の発展、文化の建設、之を内容とする道徳的実践に積極的意義を賦与することなく、絶対との冥合に生と哲学との極地を認めんとする立場は、却て絶対の動的具體性を消滅せしむる傾向を免れない。此処に哲学の方法として神秘的方法の不十全なる所以が存する。」と論ずる田辺元氏の説は妥当である。

この神秘的方法に対して、相対の独立の意義を認め、本来相対の圏内に動く反省的思惟を以て哲学の方法を可能にしようとするのが「反省的方法」である。

一体思惟は矛盾律に従って一と他とを分ち対立せしめ、斯く分析したものを同一なる普遍者の媒介に由って結合するものである。其限りに於いて思惟

第 50 号
月 1 回 発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所: 愛媛県西条市
上市甲 720-1
TEL: 080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

が分析的に区別対立せしめたものを総合するには、同一律に従い同一なる普遍者の媒介に由ってそれを結合するのである。其の結合をなす同一者は思惟の对象として亦矛盾の支配を受け、他に対して始めて一となるのである。だから斯る思惟は縦い総合の一面を有するとしても、其全体の成立は分析的であり、従って之を支配する論理は「分析論理」といわれるのである。斯かる分析論理の支配の下に立つ思惟は常に相対の圏内に動く所謂比量的(徬徨的)思惟に外ならない。如何にその総合の一面を發展せしめても絶対なる統一となる全体の思惟には達することが出来ない。如何に全体を思惟したと考えても、其全体は思惟せられた全体であり、(孫悟空が如何に飛んでも仏の掌から出られなかった)其意味に於て客観の全体に止まり、従って主観に対する相対に過ぎない。全体が思惟せられたということが全体でないことの徴証なのである。

其故哲学が全体の窮極的反省である為には、どうしても客観を思惟する立場から主観を自覚する立場へ昂揚しなければならぬ。単に客観を思惟する立場に止まる限りは、如何に其客観が客観化せられた精神作用(思惟そのものの心理作用を含みて)を包括するも、主観の作用を主観の立場で作用として自覚するのではない以上、哲学の立場に達しない。それは飽くまでも科学の立場である。所謂「科学的哲学」「一般科学としての哲学」などという主張の哲学として不十分なる所以である。これが裏に第一次反省「実在論」と呼んだものであり、哲学は科学の反省と異なる高次の反省を必須とする。そこで裏に述べた第二次第三次の反省が求められるのである。所謂第二次反省「観念論」に於ては、神秘的方法の内面的なる直接の統一をなす生の体験から、見る作用と見られる内容との合一

する直観を破つて、一と他との対立する分裂の立場に出ることを意味する。神秘的方法を破るのである。然し其処で行われる思惟は如何に総合的方面を有するも同時に分析区別の対立的相対性を脱せず、総合が外からの結合であつて内からの統一でないから真に絶対的なる統一に達することがないのである。然るに裏に第三次の反省「实在観念論」と呼んだもの「自覚」に於ては、自覚せられた我は、対象化せられて我でない物となるのでなく、客観化せられて主観でない客観に化するでもなくして、主観のまま我として自覚する我と統一せられるのである。而も自覚する我と、自覚せられる我と対立せしめらるる方面からいへば、第二次の反省を其対象面として含み、思惟の性格を保有し、論理化を容れる象面をもつ。斯くして自覚としての第三次の反省は却つて第二次の反省の分裂を統一に翻し、抽象を具体に還すという意味を有する。

以上の反省的方法の中、最も多く普通の分析論理の支配する客観の認識を重んじ、唯其内に具体的自覚の内面的意味を見出すことにより、寧ろ主観を客観に没する立場に於て哲学を立てんとするのが次の「存在論的方法」(实在論に基く)と称せられるものである。是に對して反對に主観の自覚を重んじ、客観をその根柢に由つて成立するものとして、認識の対象としての客観の構造を主観の作用的方面の総合により基礎付けせんとする方法を哲学の正道とするものを、反省一般に「認識批判的方法」(観念論に基く)と呼ぶことが出来るであらう。其中にカントの「先驗論的方法」とフッサールの「現象学的方法」とが區別せられる。そして、或は単に客観的存在の方に重きを置くのではなく、或は専ら主観の作用的方面に於ける総合にのみ着目するでもなくて、客観即主観の具体的統一を観んとするのが「解釈学的方法」であつて、其の中にデルタイの生哲学的方法、ハイデッガーの「自覚存在論的方法」を區別することが出来る。

農士道

第五章 農士論

第二節 帰農的安立

農道的安立(続)

農民よ！先ず真箇に農に立志せよ。

農民よ！先ず真箇に農に帰依せよ。

農民よ！先ず真箇に農に安立せよ。

而して農民よ！真箇に農に精進せよ。

「農士」の生活は其処から始まる。

よく人々はいう。

「近來の青年はどうも農業を好まぬ。農業をやつて居ながらどうも心から之を好きでやっているものが少い。一体どうしたら農業が好きになれるであらうかと。私は此の事に対するの答は、唯端的に「南無帰依農」の一語で足りると信ずる。農に帰依せよ、安立は其処からのみ生ずる。一体農業に限ったことではない。一切の職業、否、人生其のものは、決して美しい、楽しい、利益な、明るい一面のみではない。醜い、苦しい、不利な、暗い反面も必ず之に伴うものである。これが此の世の常である。従つて吾々人間が此の世に於て生き抜いて行く為には、何事に従うも、先ず第一此の嚴肅な事実を認識し、覚悟し、而して敢然として之に突入して邁進せねば真の救いは求められるものではない。

功德天と黑暗天

二宮翁夜話に次の一章がある。

「涅槃經に此の譬あり。或人の家に容貌美麗端正なる婦人入り来る。主人如何なる御人ぞと問う。婦人答えて曰く、我は功德天なり。我が至る處、吉祥福德無量なり。主人悦んで請じ入る。婦人曰く、我に随従の婦一人あり。必ず後より来る。是をも講ずべしと。主人諾す。時に一女来る。容貌醜陋にして至りて見悪し。如何なる人ぞと問う。此の女答えて曰く、我は黑暗天なり。我が至る處、不詳災害ある無限なりと。主人是を聞いて大いに怒り、速かに帰り去れといえ

ば、此の女曰く、前の来れる功德天は吾が姉なり。暫くも離ること能わず。姉を止めば我をも止めよ。我を出さば姉を出せと云う。主人暫く考えて二人とも出しやりければ、二人連れ立ち出て行きけりということありと聞けり。……死生は勿論、禍福吉凶、損益得失皆同じ。もと禍と福と同体にして一円なり。吉と凶と兄弟にして一円なり。云々」

これが人間生活の事実であろう。農村生活亦然り。浮薄なる耽美派的詩人が並べる美文的文章の示す様に、農業生活は甘美一面のものではない。吾々が敢然として農道生活の大道を邁進する以上、功德天と共に黒暗天をも亦招じ入れて、平然として両者を遇すだけの勇氣を有たねばならぬ。否、黒暗天を先に招じ入れて、敢えて之に驚かぬだけの覚悟と勇氣とを持し得ればこそ、功德天も共に来つて功德の光明を齎すのである。福を迎えんと欲せば、先ず苦を辞してはならぬ。幾たびか辛酸を歴て志も始めて堅いのである。況んや農業という仕事は世の人々より決して楽な仕事とはされていない。故に先ず農業黒暗天的一面―農業の短所を十分に自覚し、其の難関を突破するに非ずんば農業的功德天は訪れ来るものではない。

日本自治集団第二回会合

三浦 夏南

五月二十一日、大阪会場にて日本自治集団の第二回会合が開かれました。前回経済ブロックを作ることに論点が絞られたので、発案者である我々ひの心を継ぐ会から、議題の趣旨説明を簡単に申し上げることになりました。

私からは、大きく三点お伝えしました。一つは、経済的自立とは資本に拘束されることなく、衣食住が完全に自給できることが基本になり、その出発点は農にあること、二つ目は自治社会に於ける本来の「農」とは何かということ、三つ目は現在の「農業」が本来の「農」とは乖離した産業になっており、「農」が極めて危険な位置にあること。これらの諸点を数字ベースのデータを見てもらいながら、説明しました。農の現場にいる我々にとっては当たり前のことも、都会で仕事をされている方には驚くべき事実も多かったようで、様々な質問が出ましたが、農の復興、自給自足の確立の重要性について、理解して頂けたようです。加えて今まで農地を守って来られた高齢者の方々が続々と引退される中、とんでもない量の土地が一部の個人や法人、大企業、海外資本家にまとめられています。このままでは、我々がいくら自治ということを叫んでも、肝心の自治を行うための土地がなくなってしまう。農地確保の重要性についても、今回の会合で議論することが出来ました。

結果自治集団の当面の活動としては、とりあえず二点考えて行こうということになりました。一つは農の再生、自給自足のシステム、ノウハウの確立を現場の農家を中心に行っていくこと、二つ目は、自治集団が農を行うための農地を如何にして確保していくのかということ。この二点です。二つ目は方法論の問題、法的な問題等、色々と議論すべき



ことが多いと思うので、我々も調査して来月には報告できるようにしておこうと思います。一つ目は我々が現場で農業をしているので、金銭的支援さえあれば、いつからでも自給システム確立のために調査実践を行います。

これから農を軸に何かは動いて行きそうなので、進展があれば、月報にて報告していきたいと思います。農本自治構想は、安岡先生、竹葉先生を始めとして、大東塾の影山先生や、橘孝三郎先生など、戦前の志士達が実践しながらも、大東亜戦争の敗戦もあり、道半ばにして中断することになりました。それから長い間農本自治は忘れられた思想でしたが、それがこれから具体化していくかもしれません。希望を持って挑戦していけたらと思っています。

とよくも農園だより

三浦 美恵

たくさんのネギが育ち、畑で収穫を待つネギが今か今かと待っています。とても私達だけの力では出し切れず、親戚にも声をかけて連日大量のネギを出荷しました。普段主人・義弟・私の三人で一日かけて出荷できるネギは、出荷調整後で多くて約百五十kg分ですが、親戚が手伝いに来てくれた期間はゆったりと休みながらも、一日に約二百三十kgの出荷ができました。昔から家族親戚が集まって農作業をすることを「結」と呼び、田植えや収穫は大勢で一斉にしていたのですが、今回その「結」の力で多くのネギを出荷することが出来ました。大勢で作業をすると、単に作業スピードが上がるだけでなく、楽しく話をしながらもいつの間にか仕事が進んでいます。子供達も頑張っている様子を見てもういたくて張り切っていました。軽トラに高く積み込まれたネギの段ボールを晴れ晴れとした気持ちで見送ると、リビングの狭い机を大勢で囲みながら、賑やかに晩御飯を食べ、今後の農業の方針や子供達の成長を話しながら楽しい時間を過ごしました。

今月は播種・定植も行いました。播種はセルトレイに土を入れ、鎮圧し、湿らせておいて種を播き、また土を被せていきます。それを庭にあるビニールハウスで管理しておいて、十分に育つと畑に定植をしていきます。今まで、大人二人がペアになり、「なかよしくん」という機械で植えていましたが、最近子供達も少しずつお手伝いができるようになってきた為、もう一台購入して二台で同時に植えていきます。小さなバケツ一杯に苗を入れ、自分の腕よりも高い位置に穴のある「なかよしくん」に懸命に手を伸ばして、苗を入れていきます。子供達もお



手伝いに随分と慣れ、子供のお陰で作業が捗る場面が少しずつ出てきました。

先月号で書いていた礼儀も少しずつ実行しています。具体的には、DVD や書籍で小笠原流礼法を学んで参拝・食事時に少しずつ実践しています。正座をしている時の重心の位置や、礼をする時の呼吸のタイミングなど、意識していないとつい忘れてしまいがちな礼儀作法に日々気を配るようにしています。『小学』にこのような逸話がありました。孟子の母は、始め墓地の近くに家があったのですが、子どもが死人を埋めたりする葬式の真似をして遊んでいました。それを見て、子供の教育上良くないと家を転々としますが、最後に学校の側に移ると、師弟が礼儀を習うのを見習い、お辞儀をかわして譲り合い、礼容を作って行動する学校、ここをするようになり、母親はこここそ子供に良い環境であると、長くここに住まうて移らなかつたそうです。ここからいかに孟子の母親が周囲の環境を重視し、それを整えることに苦心したかが窺われます。自分自身の身が引き締まる思いがしました。来月も三浦家に必要なことを考えて、勤皇村の一助となるよう、懸命に努めたいと思います。



★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

総会を七月十七日十一時より行う運びとなりました。詳しくは別紙を参照してください。

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれたい会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を灯し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

- 一般会員 三千元
- 賛助会員 一万円
- 特別賛助会員 三万円
- 支援会員 一万円